分　科　会	小　３	都　市　名	岡　　崎
提　案　者	岡崎市立宮崎小学校		鈴　木　巨　裕

持続可能な社会の実現を目指し、学びを問い合い、自己の責任を考える社会科の授業
－３年「火事からくらしを守る」の実践を通して－

１　はじめに

岡崎市社会科部の昨年度の研究（５年「岡崎の森林を守っていこう」）では、次のような成果が得られた。まず、導入の段階で、教材との出会わせ方を工夫し、森林の多様な問題に取り組む人に迫る単元構成を組み立てることで、切実感を抱いて意欲的に追究できた。さらに、森林に対する様々な立場や視点による調べ学習を生かしたかかわり合いの場を設定することで、自己の考えを深められた。また、地域社会に発信する場を設定し、自己評価活動を繰り返すことで、社会の一員として自分でできることを考え、地域社会に積極的に働きかける姿勢を育むことができた。しかし、子どもたちの生活や地域に根ざし、学びの質的な深まりを図る学習課題のあり方や、社会の一員としての思いをもち、地域社会への参画意識を促す単元の終末の工夫が課題として残った。これらの成果と課題を踏まえ、岡崎市社会科部では「自己の責任を考えるための単元構成や教師支援の工夫」を重点課題として、３年次の研究を進めた。

２　研究の計画

（１）研究単元の設定理由

本学区は旧額田町にあり、近年は過疎化が進み（人口が1949年の2993人から2008年は1500人）、昨年、本校に大雨河小学校と千万町小学校が統合された（児童数が３校合計で1945年の566人から2011年は38人）。若者が少なく高齢者の割合が高いので、地域コミュニティーの存続すら将来的には危うい地域である。その中で、地域の安全安心、さらにコミュニティーの中核として、消防団が大きな役割を果たしている。このような学区なので、持続可能な社会の実現のために、消防団は重要な地位を占めており、本校児童の父親のほとんどが消防団員を経験している。そのため、家族や親戚などから容易に聞き取り調査ができる。それを生かして話し合いの場を仕組み、学びを問い合うことができる。こうして消防団員の活動の様子や思いを学ぶ中で、子どもたちは地域社会を形成していくには一人一人が自己の責任を考えて行動していかなければならないことに気づくと考えた。

（２）研究テーマに対する考え方

①　「持続可能な社会の実現を目指す」…現代社会には、克服すべき多くの課題が山積しているため、個人主義的な考え方だけでなく、社会全体を見通した行動をしていかなければならない。様々な立場、多様な価値を認め合いながら、よりよく生活できる社会の形成に向けて主体的に考え、参画していく姿勢を育む必要がある。特に、過疎地域では、「限界集落」という言葉があるように、地域の存続こそが持続可能な社会である。本単元では、過疎化の進んでいる宮崎学区の安全、安心を消防団が中心となって守っており、活動はすべて学区民がボランティアで行っていることに気づかせるようにする。

②　「学びを問い合う」…確かな調べに基づいて構築した自分の考えが他者の考えに触れることで、自分の考えの確かさや変容に気づくことができる。そうした過程を経ることで、自分の学びを問い直し、新たな見方や考え方に気づき、自己の考えを深めていくことと考える。本単元では、消防団員を経験した父親を中心に聞き取り調査を行い、そこから得た自分の考えを話し合わせる。

③　「自己の責任を考える」…持続可能な社会の実現には、市民の社会参加が不可欠である。生活の質の向上を目指して、社会の一員として地域社会や自らの生活へ働きかけていくことができることと考える。本単元では、消防団員の活動の様子や思いを学ぶ中で、地域社会を形成していくために一人一人が自己の責任を考えて行動していることに気づき、消防団に対する自分なりの思いをもつようにさせる。

（３）目指す子ども像

①　児童の実態

・本学級は宮崎地区４名、大雨河地区４名、計８名であり統合に伴い４月から同じクラスになった。

・１学期の学区探検では、知っていることを説明したり、知らないことに気づいたりすることを楽しんだ。地域のことをもっと知りたいという意欲を持っている。

・父親（８名中６名）や近所の人が消防団員であり、運動会や防災訓練などで消防団の人たちと接する機会は多いが、消防団について意識することはほとんどない。

・係や委員会の仕事を忘れてしまうなど、責任感に欠ける。

②　教師の願い

・地域社会の人々の活動に関心を持ち、住民みんなで住みよい宮崎地区になるように活動していることに気づかせたい。

・聞き取り調査や劇の創作を通して、父親をはじめとする消防団員やその家族などの生き方に気づきながら学習を進めたい。

③　社会科の目標とのかかわり

・地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。＜学習指導要領第３学年及び第４学年の目標（１）＞

④　目指す子ども像

・消防署や消防団に関心を持ち、それらの活動を意欲的に追究する子ども。

・消防団活動について追究する中で、地域社会の一員として活動することの大切さやすばらしさに気づくことができる子ども。

（４）研究の仮説

児童の実態や教師の願い、社会科の目標から考えた「目指す子ども像」に近づくために、次のような研究の仮説を設定した。

仮説１：地域のくらしを支える事象を、子どもたちにとって身近な所から取り上げ、それにかかわる人々の思いに触れることで、子どもたちは意欲的に追究するだろう。

仮説２：子どもたちが驚きや疑問をもったところで一人調べと話し合いの場面を設定すると、学びを問い合い､お互いの考えを練り合うことを通して地域の安全を守る活動の大切さに気づくだろう。

仮説３：単元の終末において、学習をふり返りながら、学習したことを表現して伝える場を設定すれば、地域社会の一員として活動することの意義を理解するだろう。

（５）研究の手立て

仮説を検証するために、次の四つの手立てを単元に位置づけ、実践を進めることにした。

①消防に対する関心を高めるための工夫（仮説１）

学区内で起きた山火事や地域の防災訓練などを取り上げ、消火活動についての関心を引き出す。さらに、消防署や消防団詰所見学を行う。

②身近な人への聞き取り調査（仮説１）

家族や親戚などに対して聞き取り調査を行うことで、消防団活動に親しみをもたせたり、活動への誇りをつかませたりする。

③話し合う場面の設定（仮説２）

消防団詰所見学の後に、子どもの思いを生かして一人調べを行う。そして、消防団の人々の役割や思いに視点を絞った話し合いの場面を一人調べの後に設定する。

④学びを振り返り、表現して伝える場面の設定（仮説３）

学びの中から高まった子どもの思いを表現するために、台本を作ったり、劇を演じたりすることで、事象を見つめ直させ、地域社会の一員として活動することの意義をより実感させる。

（６）単元構想図（２０時間完了）

○防災訓練を思い出し、中金の山火事を知る。＜手立て①＞

・この前、地区の防災訓練に参加したよ。　・中金町でも大きな山火事があったなんて怖いな。　・お父さんも火事を消しに行ったことがあるよ。

素朴な願い：消防のことを知りたいな

消防について知りたいな（１時間）

・消防車ってどうなっているのかな。　・どうやって火を消すのかな。

・消防署って、どうなっているのかな。

≪消防署を見たり、話を聞いたりしたいな。≫

消防署へ行ってみよう（５時間）

○東消防署額田出張所へ見学に行く。＜手立て①＞

・消防服やホースはとても重いのに動き回る消防士はすごい。

・消防車にはいろんなボタンがありそれを使いこなすのがすごい。

・消防署には、仮眠室があって、一日中火事に備えている。

・消防車が１台しかないけれど、これで火事が消せるのかな。

→消防団と協力して火事を消しているんじゃないかな。

《消防団のことを知りたいな。》

消防団について調べよう（５時間）

○額田消防団第７部詰所へ見学に行く。＜手立て①＞

・思ったよりもたくさんの道具があった。

・消防団は狭くてきつい。⇔思ったよりも広かった。

・消防署とは違って、人がいなくてびっくりした。

《消防団と消防署って、何が違うのかな。》

教材としての価値ある願い：消防団のことをもっと知りたい

○消防団について、一人調べをする。＜手立て②③＞

・地域の人と交流できるから楽しい。⇔・疲れるしたいへんだから、楽しくない。

・訓練…朝４時から１ヶ月半も行う。大会があるときに訓練をする。

・一週間に１回、機械の整備や消防車のそうじをする。

・火事…お父さんは１０回くらい行った。火事の時は、いろんな仕事がある。

・洪水を防ぐ…川岸に土嚢を積み上げる。

→たいへんだけど、宮崎を守るために、消防団を続けているんだね。

≪みんなで協力し合って地域を守っているんだなあ。≫

学んだことを劇にして、みんなに伝えよう（９時間）

○劇の台本を作ろう。＜手立て④＞

・消火や訓練の様子を演じよう。

→・消火活動では、指揮、吸水、配水、放水など様々な役割がある。

・素早く火事を消すために、厳しい訓練をしている。

・消防団活動の大切さも伝えよう。

→・消防団のおかげで、安心して暮らせる。

・つらくても、宮崎を守るためにがんばっている。

○消防団の活動を劇にして、学芸会で演じる。＜手立て④＞

・ぼくも将来、消防団員になって、がんばりたい。

≪これからもみんなで宮崎の町を守っていきたいな。≫

【教師支援】

・子どもたちも参加した、地区の防災訓練の様子を思い出させる。

・中金の山火事の新聞記事を提示し、火事を身近なものとして捉えさせる。

・消防について、知っていることを出させる。

・消防署の方に、できるだけの見学と体験ができるようにお願いしておく。

・分かった事実に対して思ったことを言わせる。

・非常時の連絡体制を、郷土読本『おかざき』を活用して確認させる。

・額田地区の消防署と消防団の位置を示す地図を用意する。

・消防団第７部詰所見学を行う。

・消防署と消防団の違いや同じ所を見つけるようにさせる。

・見学だけでは分からないことについて、父親などから一人調べをする。

・分からないことだけでなく、具体的な消火活動や操法大会などの活躍の様子も聞き取らせるようにする。

・みんなで脚本作りを行う。

・分からないことは再度一人調べさせるようにする。

・劇の最後に、この学習をして感じたことを話させる。

３　研究の実際

（１）抽出児童の設定

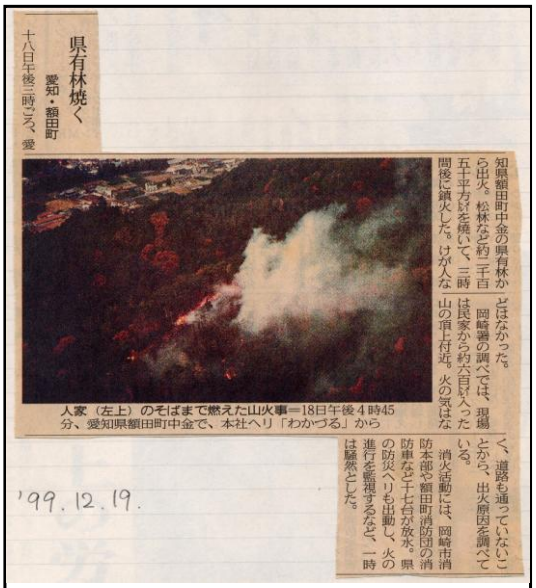
本研究実践では、次の二人の児童を抽出児童として設定した。

児童Ａ：学習に対する意欲はある。思いつきやひらめきに光るものがあるが、粘り強く取り組もうという態度に欠ける。父親は消防団では統括部長という責任ある役職まで勤め上げ、地域の町おこしにも関わっているが、児童Ａはそのことを知らない。クラスの係活動も忘れてしまうことが多い。

児童Ｂ：積極的に学習に参加する時と、意識が散漫になってしまう時の差が大きい。地域の防災訓練やお祭りなどに参加して楽しんでいる。父親は消防団員として12年間活動してきた。

（２）山火事との出会い

８月末に行われた地域の防災訓練に、４人が参加した。児童Ａ、Ｂは共に参加していた。どんなことがあったか尋ねると、「ホースで水を出すことをやらせてくれたよ。」（児童Ａ）、「担架で運ぶ訓練で、わたしは担架に乗りました。」（児童Ｂ）などと体験談を話した。他にも、炊き出し訓練や消火器訓練、非常食の配布などが出された。そこで、何のためにこんなことをやるのか尋ねると、火事、地震、台風の三つが出された。ここで、火事を身近なものに感じさせるために平成11年の中金町の山火事の新聞記事を提示した。中金町は、３人の児童（Ｃ、Ｆ、Ｇ）が住んでいる。そのうちの児童Ｃが、「中金の森が燃えていて怖かったです。」と感想を書いたように、火事について関心を持つきっかけとなった。児童Ａは、「もう、こんな火事は嫌と思った。」と書いているが、まだ、火事について表面上でしか考えられていない。児童Ｂは、「犯人は誰か。たぶんたばこを捨てた。」と書いたように、火事の具体的な様子を考えようとしている。


県有林焼く
愛知・額田町
十八日午後三時ごろ、愛知県額田町中金の県有林から出火、松林など約二千百五十平方㍍を焼いて、三時間後に鎮火した。けが人などはなかった。
岡崎署の調べでは、現場は民家から約六百㍍入った山の頂上付近。火の気はなく、道路も通っていないことから、出火原因を調べている。
消火活動には、岡崎市消防本部や額田町消防団の消防車など十七台が放水。県の防災ヘリも出動し、火の進行を監視するなど、一時は騒然とした。
人家（左上）のそばまで燃えた山火事＝18日午後４時45分、愛知県額田町中金で、本社ヘリ「わかづる」から
'99.12.19.

地元の山火事の新聞記事

（３）消防署（額田出張所）の見学

この火事の消火活動に担任の私自身が消防団員として参加しており、その時の様子を話した。しかし、話だけでは具体的な様子がよく分からない。消火活動を具体的に知りたくなった子どもたちに、消防のことを知るためにはどうすればよいか尋ねると、「消防署へ行きたい。」という意見が出された。そこで、岡崎市東消防署額田出張所の見学をすることになった。子どもたちは、消防車や救急車の見学、防火服の着衣体験、放水体験、署内の見学などをし、たくさんの驚きや発見をした。児童Ｂは、「救急車の中は、治療道具がいっぱいあり、びっくり！」「火事の時着る服は、100度の火の中に10秒間いられるなんてすごい」のように、「びっくり」「すごい」などの言葉を使い、感心している様子が窺える。一方、児童Ａは、「思ったより消防車は少ない」という感想を持った。額田出張所は消防車が１台しかなく、この発言から、子どもたちに、中金町の山火事は、たった１台で火事を消したのか尋ねた。すると、「岡崎市消防本部や額田町消防団の消防車など17台が放水。」という新聞記事の記述を見つけた。そこで、消防団が何かを尋ねると、児童Ａ、Ｃ、Ｄが、「僕のお父さんが入っているみたいだよ。」などと話した。児童Ｄに、「君のお父さんは工場で働いていると思っていたけど、消防署で働いているの。」と聞くと、「違う。ううん。」と言い、児童は黙ってしまった。そして、大代町と石原町の消防団詰所の写真を提示すると、「あ、これわたしの家の近く。」、「見たことある。」、「これが消防団じゃない。」などのつぶやきが出た。そして、次は消防団詰所の見学をすることになった。

（４）消防団詰所の見学

学校から一番近い、石原町の詰所へ行った。いろんな発見があったが、子どもたちには、消防署との比較から気づくことを出させた。児童Ａは、「人がいなくてびっくりした。」と詰所には人がいないことに驚いていた。また、児童Ｂは、規模は小さくても消防署並みの機能があることに驚いていた。児童Ｄは、消防車が１台しかないことを心配した。そこで、なぜ人がいないのか考えさせると、みんな自分の仕事に行っているからいないということに落ち着いた。見学前日に、自分のお父さんが消防団員かどうか確認したことから、６名のお父さんが、仕事と消防を両立させていることを知っていたためである。それならば、お父さんに聞けば消防団のことが分かるということで、消防団についての聞き取り調査を行うことにした。父親が消防団員ではない児童Ｅは自分のおじさんから、児童Ｆは現役消防団員の本校４年担任から聞き取りをした。

（５）消防団についての聞き取り調査

聞き取りの相手が父親ということで、生々しい様子を聞き取ることができた。児童Ａ、Ｂ共に７つの聞き取りをしてきた。例えば、「お父さんは何才で消防団に入ったか。」（児童Ａ）のように、父親個人に関わる質問が目立った。

次の日、聞き取りをして思ったことを書かせた。「10回も火を消しに行っているなんて､がんばっている。お父さんは26才から始めて、たいへんそうだと思った。」（児童Ａ）、「朝４時からやるなんて、お父さんはたいへんだっただろうと思った。中金の大火事の時、お父さんが行っていてびっくりした。」（児童Ｂ）のように、消防団員だった父親が地域の安全を守る活動に積極的に参加していて、その活動の大切さに気づいている様子が窺える。

＜児童Ａの感想＞

・消防団は、消防署より、現場に行くのが早くてすごい。
・（お父さんは）10回も火事を消しに行っているなんて、がんばっていると思った。
・お父さんは（消防団員を）26才から始めて、たいへんそうだと思った。
・消防団は、訓練をやってくれて優しい。

＜児童Ｂの感想＞

・消防団と消防署はだいたい同じ活動で、（消防団員は、本業の）仕事とかたいへん。
・（訓練を）朝４時からやるなんて、お父さんはたいへんだっただろうと思った。
・中金の大火事の時、お父さんが行っていてびっくりした。

また、聞き取りの人物が一人一人違うため、多様な考えに触れることができた。例えば、児童ＢやＥは、「消防団活動は楽しい」と聞き取ったのに対して、児童Ｇは、「楽しくない」と聞き取っている。調べたことを出していくと、楽しいことよりもつらいことの方が多いことが分かる。そのため、消防団活動が楽しいか楽しくないかという視点で話し合うことで、消防団の人々の役割や思いを考えることができると考えた。

（６）たいへんなのに、なぜ消防団を続けているのかな

調べたことの発表会のはじめに、「地域の人たちと交流できるから、消防団活動は楽しい。」という調べをした児童Ｅを第１発言者にした。そして、楽しいか楽しくないかという視点での発言を求めた。すると、児童Ｂが、「小中学校の友達と会えて、一緒にお酒が飲めるから楽しい。」と発言した。それに対し、児童Ｇが、「疲れるから楽しくない。」という父親の話を発言した。ここで、子どもたちに、一人調べの内容から、楽しそうなこと、または楽しくなさそうなことを話すように求めたが、発言が止まってしまった。唯一、児童Ａが、「消防車の後ろに乗るのは気持ちがいいから、楽しい。」と発言した。表面的なことしか考えられない様子だったので、とりあえず、調べたことを出させて、それを楽しいか楽しくないか分類していくことにした。

まず、児童Ｅが、消防操法大会の話をした。大会に向けての訓練はとてもつらいものなのだが、子どもたちにそのことに気づかせるため、訓練について出させた。すると、児童Ｂが、「朝４時からの訓練が１か月半あるからたいへんって言っていました。」と発言した。ここで出された「たい

へん」をキーワードにして、たいへんなことを出させた。すると、「（火事の時）簡単なことは全然ない」（児童Ｈ）、「（お父さんは消火活動に）いっぱい行っているんだな」（児童Ａ）、「（消火活動の回数は）数え切れない」（児童Ｈ）、「（入団したのは）長男だから、家を継ぐ人だから」（児童Ｅ）、「一週間に一回、機械の整備や消防車のそうじをする」（児童Ｃ）のような発言が続いた。

そこで、「たいへんなのに、なぜ消防団を続けている（た）のか。」という学習課題を投げかけた。

児童Ｇは、父親は楽しくないのに消防団を続けていることの答えを、消防団の意義という観点から自分なりに見つけられた。

T　：みんなは、何のことについて調べてきたかな？
児童E：訓練するときはどんな時か、聞いてきました。僕の予想では、乾燥したときや火事が起こりそうな時にやると思いましたが、消防の大会があって、それは、規則を守って、いかに速く水を出すか、という大会だそうです。
T　：大会のための訓練って、楽しそう？
児童A：楽しくない。休みがつぶれる。
T　：訓練のことを聞いてきた人、いませんか？
児童B：訓練は、過酷だって言っていました。真面目に真剣にやらないといけなかったからです。
児童D：うちのお父さんは、訓練の時間は決まってないと言っていた。
T　：Bさんは、訓練は何時からって聞いた？
児童B：朝４時から早朝訓練が１か月半あるからたいへんだと言っていました。
T　：調べた中でこれはたいへんだなあということはありませんか？
児童H：他の家に火事を移さないようにすることがたいへんで、簡単なことは全然ないと言っていました。
児童A：お父さんは火事を１０回消しに行ったと言っていて、いっぱい行っていてすごいなと思いました。
児童H：何回火事を消しに行ったか聞くと、数え切れないと言っていました。
児童E：おじさんが消防団に入った理由は、長男だから、家を継ぐ人だからたいへんだけど入ったと言っていました。
児童C：一週間に一回、機械の整備や消防車のそうじをするのでたいへんだと言っていました。
T　：こんなにたいへんなことがあるのに、なぜ長い間消防団を続けているんでしょうか？

消防団のたいへんさに気づく場面（第11時前半）

児童Ａは、火事を消すまでの時間に着目した考えを持った。消防署は、本校から10km以上離れており、見学に行って気づいた距離感を生かした発言である。しかし、消防団員の心情には迫っていない。次の児童Ｂの発言は、父親からの聞き取りからの発言である。父親の入団理由を引用したため、入った理由になってしまっているが、この発言に触れることで、児童Ａは問題を実感的に捉えた発言になっている。児童Ｃの発言も、児童Ｇ、Ｂ、Ａに影響されているが、思考の根底には、導入時の山火事の新聞記事で怖いと感じたことがあると考えられる。

ところが、地域住民を守るという考えだけで、仕事と両立させていることのたいへんさには考えが及んでいない。そこで、訓練を午前４時からやっているわけを確認した。私は、仕事があるために昼間はできないと子どもたちが考えると思っていた。しかし、「近所の人に迷惑をかけないように」（児童Ｂ）、「朝早くに火事が起きたときのため」（児童Ａ、Ｃ）などと、私が想定していなかった考えが出された。そこで、切り返すことで、仕事との両立のたいへんさに気づかせた。児童Ａが、「朝早くでないと、消防団の人は、自分の仕事ができない。」と

T　：それでは、考えたことを発表しましょう。
児童D：火事をなくすためだと思います。
児童G：火事を消して、みんなが安心して暮らせるように。
児童A：消防署の人が来るまでに時間がかかるので、火が広がらないようにするため。
児童B：人の命を守るために消防団に入った。
児童A：（児童Bに）似ています。僕たちを守るために入っているのかなと思いました。
児童C：みんなを守って、わたしたちが安全に暮らせるように。

たいへんなのになぜ消防団を続けているのか（第11時後半）

発言したように、ここで正しい認識ができた。教師が、子どもたちは当然分かっていると思っていることでも、全く違う認識の場合がある。重要な事項は、このようにきちんと押さえておくことが大切だと改めて気づかされた。

授業の振り返りでは、児童Ａは、「朝４時からの訓練を１か月半もしている」と書いた。思いではなく、新たに知った事実を書いているだけなのだが、「も」という言葉に、たいへんなのにみんなのためにがんばっていて立派だという思いがこめられていると考える。また、児童Ｂは、「みんなのお父さんとかたいへんなのにがんばっていてすごい。」と書いており、消防団を身近なものとして捉えていることが分かる。

（７）劇の台本作り

この時期、各クラスでは、学芸会で演じる劇が決まってきており、当然、子どもたちからは、「先生、何やるの。」と連日聞かれていた。子どもたちに、みんなが勉強してきた消防団のことを劇にして演じないかと話すと、「やったあ。」「やりたい。」と歓声が上がった。この歓声には、消防団員として地域に貢献している父親を誇りに感じ、さらに聞き取りや話し合いを通して消防団活動を学んだ自信が表されていると考える。

劇は、３、４年生合同で行った。劇を演じさせたのは、話し合いだけでなく、台本作りや劇化を通した疑似体験から、消防団活動をより理解し、地域社会の一員としての自己の責任まで考えさせるためである。

まずは実際の操法大会のビデオを見せてイメージを湧かせた。次に、一人一人に劇のあらすじを考えさせた。子どもたちの考えるストーリーは、訓練中に本物の火事が起きて消火する、というような感じで共通していた。そして、台本を作るにはもっと詳しく知っていないと作れないということで、台本を作る上で必要な聞き取りを再度行った。そして、操法に関する聞き取りをしたり、全員に、父親以外の家族の思い（例えば、「とても頼りになる（児童Ａの母親）」、「ありがたい気持ち（児童Ｂの母親）」）を聞き取らせたりした。劇には、消防団員からの視点だけでなく、協力している家族の視点も入れてバランスを取る必要を感じたからである。

これらのあらすじや聞き取り調査を基にして、みんなで台本を練り合った。例えば、右記の場面は、前述の母親からの聞き取りを生かして作ったせりふである。

台本の読み合わせを行い、まずは、学習した内容と合っているか、せりふの言い方はこれで良いかなどを話し合った。次に、劇のタイトルをみんなで考えた。「朝早くや休みの日に訓練をしていてたいへんだから。」（児童Ｃ）、「ぼくたちのためにがんばっていてくれるから。」（児童Ａ）、「宮崎のみんなのためにがんばってくれているから。」（児童Ｈ）など、学習を生かした話し合いができた。そして、「がんばれ！みんなの宮崎消防団」となった。

＜操法大会後の消防団員とその妻の会話＞

お帰りなさい。また飲んでいるんですね。男はこうやって、すぐにお酒を飲めるから、いいですね。

だって、今日は操法大会で優勝したんだぞ！

優勝しなくたって、しょっちゅう消防団で集まって飲んでるくせに。

うるさいなあ。

でも、消防団のおかげで、安心して暮らせるから、しょうがないか。

これからも、宮崎の安心のために、がんばるぞ！

（８）劇を演じて

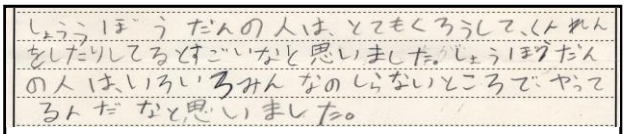
本番では、立派に演じきり、子どもたちは満足感を得た様子であった。来賓の方々は、劇の後、消防団談義に花を咲かせていた。

保護者に、劇を見ての感想を書いていただいた。例えば、児童Ｇの父親は、「消防団の苦労を息子に理解してもらえたようで感激した。」と書いており、児童Ｂの母親は、「消防団の家族として大変だったのに楽しく見られた。」と書いている。さらに、児童Ａの母親は、「子供達が、消防団の、大変だけれどもとてもすばらしい活動であるということを理解し、応援してくれている気持ち

が分かり、とても感動しました。（中略）とても感謝しています。」と書いている。保護者から見て消防団活動の大切さに子どもたちが気づくことができ、良かったと感じていることが分かる。

子どもたちには、学習のまとめを書かせた。児童Ａは三つの内容を書いている。一つ目については、第１１時の話し合い後の振り返りでは、「朝４時からの訓練を１か月半もしているんだなあと思った。びっくりした。」と書いていた。ところが、学芸会後には「朝４時から訓練をして、たいへんだなあと思った。」のように変容している。劇化を通して、訓練の様子を理解し、それによって、驚き（びっくり）が共感（たいへんだ）へと変わっていった。

児童Ｂも、聞き取り、話し合い、劇などをすべて含めた思いになっている。「苦労している」「すごいな」「みんなの知らないところでやっている」という言葉から、消防団員の活動の意義に対する理解を深めたことが読み取れる。


しょうぼうだんの人は、とてもくろうしてくれんをしたりしてるとすごいなと思いました。しょうぼうだんの人はいろいろみんなのしらないところでやってるんだなと思いました。

児　童　Ｂ　の　ま　と　め

４　研究のまとめ

（１）仮説１の検証

地域の防災訓練についての話し合いでは、防災に対する関心が高まった。さらに、中金の山火事の話し合いでは、身近な場所で火事があったことに驚きを感じ、火事に対する意識が高まっていったことから、手立て①は有効であった。

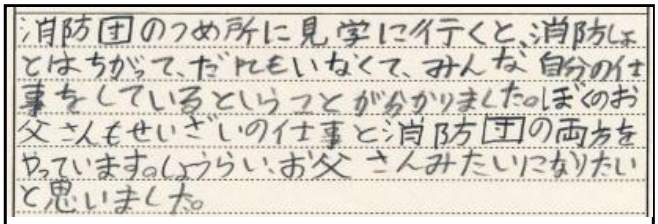
また、消防団についての一人調べでは、父親を中心とした身近な人からの聞き取り調査を何度も行った。子どもたちは、ノートいっぱいに書き込んでいた。「お父さんは26才から始めて、たいへんそうだと思った。」（児童Ａ）、「朝４時からやるなんて、お父さんはたいへんだろうと思った。中金の大火事の時、お父さんが行っていて、びっくりした。」（児童Ｂ）のように、身近な人の奮闘する姿に触れて、子どもたちはその姿に誇りをもちながら一人調べを続けることができたことから、手立て②は有効であった。

（２）仮説２の検証

例えば、児童Ａは、聞き取りから、「お父さんは26才から消防団員になって、たいへんだ。」という思いを持ったが、消防団活動が楽しいかという話し合いでは、「消防車の後ろに乗るのは気持ちがいいから、楽しい。」といった表面的な意見しか言えなかった。しかし、訓練についての発言の後、「楽しくない。休みがつぶれる。」という考えに変わった。また、消防団員を続けている理由の話し合いの場面では、「消防署の人が来るまでに時間がかかる」といった考えが、「僕たちを守るため」のように、消防団員の心情に迫り、地域の一員としての責任感で活動していることにも気づいたことから、手立て③は有効であった。

（３）仮説３の検証

劇の台本作りでは、操法や家の人の思いなどをさらに追究して、台本に盛りこんだ。そして、劇の最後には、一人一人に思ったことを発表させた。児童Ａは、話し合いの時点では、「僕たちを守るため」「消防署の人が来るまでに時間がかかる」などと客観的に見ていたのが、自分も地域の一員であることを意識するようになった。児童Ｂも当初は「たいへんだ」という思いが強かったが、最後には消防団活動の意義がより実感できたことが窺える。そのため、手立て④は有効であったと言える。


消防団のつめ所に見学に行くと、消防しょとはちがって、だれもいなくて、みんな自分の仕事をしているということが分かりました。ぼくのお父さんもせいざいの仕事と消防団の両方をやっています。しょうらい、お父さんみたいになりたいと思いました。

児童Ａが考えた劇の最後のせりふ

５　今後の課題

・自己の責任を考えるとき、地域全体に目を向けさせるための支援はどうあるべきか。

・客観的な根拠にこだわって考えを深めるための手立てをどう工夫するか。